

第6回びわコミ会議を開催しました！

マザーレイクフォーラム運営委員会

平成28年8月20日（土）、コラボしが21（大津市）にて「第6回マザーレイクフォーラムびわコミ会議」を開催しました。今回はその概要についてご紹介します。



びわコミ会議の概要

琵琶湖流域の保全に関わる人たちが一同に会し、お互いの立場や経験、意見の違いを尊重しつつ、思いや課題を共有し、琵琶湖の将来のために話し合うのが「びわコミ会議」です。この会議は、2011年に策定された「マザーレイク21計画（第2期）」の進行管理も担っています。

第6回を迎えた今回のテーマは「恵み 味わい 暮らし つなぐ」。県内外から212名（76団体）もの人が参加し、琵琶湖の食やそれを取りまく私たちの営みなどのテーマについて報告を聞き、また話し合いました。



みんなつながる報告会（午前部）

午前のプログラムでは、5つの団体から琵琶湖の「恵み」や「食」、「暮らし」、また、森から川、琵琶湖までの「つながり」に関わる取組についてご報告いただきました。

「米原市ビワマス倶楽部」からは、米原市を流れる天野川にビワマスを戻す多様な取組についてご紹介いただきました。「TANAKAMI こども環境クラブ」からは、地域の子どもたちが田上山で見つけた生きものについて紹介してくれました。



その他、「須原魚のゆりかご水田協議会」、「有限会社池田牧場」、「滋賀県琵琶湖環境科学研究センター」からも活動についてご報告いただきました。各団体からの報告の後、それぞれの報告内容に関連するデータ（ビワマスの漁獲量、漁獲量に占める水田放流魚の割合、シカによる食害の変遷など）を提示し、活動や事業（アウトプット）がどのように環境の変化（アウトカム）につながるのかについても認識を深めました。また、参加者に配布された「びわ湖と暮らし2016」をもとに、琵琶湖のいまを様々な指標で振り返る「びわ湖なう」の発表も行いました。

最後に、今年3月までに運営委員会へご寄付をいただいた「びわ湖チャリティー100km 歩行大会実行委員会」「びわカンゴルフコンペ」「Flower Produce ichika」の3団体の代表者をお招きして、松沢松治委員長に目録を贈呈いただく寄付金受領式を行いました。

びわ湖のこれから話さへん？（午後の部）

午後のプログラムでは、「びわ湖と活動連携」「びわ湖と外来種」「びわ湖と漁師」など15のテーマ別グループに分かれて、現在の課題や今後の取り組みなどについて話し合いました。真剣な話や笑い声、ときには歌（！？）まで聞こえ、どのテーブルも多様なメンバーによる対話を楽しんでいるようでした。

グループでの話し合いを終え、メイン会場に戻ってきたところで、これから1年間、自分が琵琶湖のために何をするかを宣言する「私のコミットメント（＝約束）」を発表しました。「琵琶湖畔で家族とキャンプする」「湖魚をもっと食べる」「毎日琵琶湖の水に感謝する」など、多様なコミットメントが提示されました。

最後に各グループの代表者が登壇し、グループ内での話し合いの様子と、各グループでまとめた「キーセンテンス」を発表しました。

キーセンテンスは今後「びわ湖との約束」として取りまとめられ、行動指針として活用していくとともに、計画の見直しの際に活用していきたいと考えています。



マザーレイクフォーラム運営委員会委員より一言

「午後の部でテーマ「びわ湖とものさし」を担当して」

「琵琶湖の善し悪しをどのように測ればよいか」について話し合うテーブルの進行役を担当しました。結果、私たちの暮らしやそこにいる人に焦点をあて、多様な人たちの感じる琵琶湖に耳を傾けていく必要があるとの認識から、キーセンテンスは「人間の五感の数値化に挑戦！」となりました。科学的データだけでなく、人間の感覚を大事にした新たな「ものさし」を考えていくべきと思いを新たにしました。

（滋賀県琵琶湖環境科学研究センター 佐藤祐一）

